

仲間と親とあゆみ続けて

32年間の障害者福祉実践

第2回 デイサービスみなみでの出会い

1990年、名古屋市にある重度重複の障害をもつ仲間たちが通う「デイサービスみなみ」で重度重複の仲間とお母さんたちと出会いました。

名古屋市で重度重複の障害をもつ仲間たちが施設に通所できるようになったのは、市の独自の重症心身障害者の通所事業ができた1995年からです。それまではほとんどの方が在宅を余儀なくされていました。

デイサービスみなみ（以下、「デイ」）は国の事業を名古屋市の補助金制度で支える形で1985年にスタートしました。仲間たちは、月・木曜日は重心のグループ、火・金曜日は身体障害のみのグループに分かれて週2回の通所ができるようになりました。職員は看護師含めて5名体制で、曜日ごとに10名前後の仲間たちが通所していました。

「人間らしい暮らし」とは何か

制限をしていました。高齢の母親にとって入浴介助が負担になっており、体重を減らすために昼食の量は少なめにしていた、と職員に話していました。

そんな彼女は、1999年に県内北東部の設楽町にできた療護施設に入所できることになり、「機械入浴だと気を遣わずに肩までお湯につかれるのが一番うれしい」と話されました。お湯につかることは脳性麻痺の仲間たちにとって体の麻痺が少しやわらぐ大好きな時間です。増川さんは設備がないところでは介助者に迷惑をかけてしまうと周りに気を遣

重度の脳性麻痺の竜野さんは、身体障害者療護施設に空気がなく、老人病院で家政婦さんの介護を受けながら生活されていた。竜野さんは福祉タクシーで週に2回、デイに通っていました。

老人病院では家政婦さんに気を遣い水分をあまりとらないようにしていたようです。「ここでは、トイレに行きたい時は遠慮なく言ってください」と伝えて、トイレでいろいろな会話をしました。その後、念願の療護施設に入所することができた竜野さん。施設の職員さんとたまに、夜、お酒を飲みに行くのが楽しいと話していました。竜野さんとの出会いが、「障害者にとって人間らしい暮らしの場はどこで、何が大切なのか」ということを考える出発点になりました。

38歳だった増川さんも、重度の脳性麻痺で、福祉タクシーを使って週2回通ってきていました。家では70代の母親が彼女の介護をしていて、トイレの回数を減らすために水分量の調整をしていました。デイの一泊旅行では職員2名体制で介助をすると、「温泉はやっぱりいいなあ」と言う増川さん。職員は人間らしい暮らしを少しでも実現できるお手伝いをしていました。当時はヘルパーの制度もなく、デイでの外出が唯一の楽しみだったようです。

そんな彼女も70歳の古希を迎えます。療護施設の職員から近況報告が写真といっしょに届きました。

「体を動かす時ゆっくりにしかできなくなった」「物を落とすことが多くなった」となげくこともありましたが、増川さんのモットーは「元気で、自分のことは自分でやる」です。むずかしいかなと思うことでも、「大丈夫、できんかったら言うからお願いね」ということばが返ってきます。自分のことだけでなく、仲間の様子を気にかけてたり周囲に気を配っています。毎年、ポッチャ大会の参加と松山千春のコンサートに行くことを目標に頑張っています。ポッチャは施設の日中活動でも楽しく行なっていますが、「勝ちたい」と熱中してとりこんでいます。今後も増川さんの生活と目標を応援していきたいと思っています」

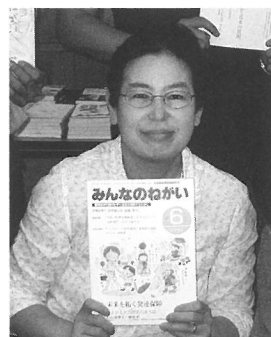
増川さんの熱心な様子を写真で見ることができて、うれしかったです。

ホットケーキづくりは楽しいなあ

デイの実践で私が一番好きだったのは、ホットケーキづくりです。その後のいろんな実践現場でもとりくみました。道具を使って、何かを調理していく過程は、乳児期後半の発達



ポッチャをする増川さん



ゆたか希望の家相談支援事業所

佐藤さと子

さとう さとこ／日本福祉大学卒業後、社会福祉法人ゆたか福祉会に勤める。全障研愛知支部事務局長